

銭形平次捕物控

復讐鬼の姿

野村胡堂

青空文庫

本篇は、
銭形平
次がま
だ独身
で活躍
してい
る頃の

話です。

一

「た、助けてくれ」

若党の勇吉ゆうきちは、玄関の敷台へ駆け込んで眼を廻してしまいま

した。

八丁堀の与力よりき笹野新三郎の役宅、主人の新三郎はその日、鈴ヶ

森の磔^{はりつけ}刑に立ち会つて、跡始末が遅れたものか、まだ帰らず、

妻のお国は二三人の召使を供につれて、両国の川開きを見物かた

がた、浜町の里方に招かれて、これもまだ帰らなかったのです。

留守宅は用人の 小田島伝蔵^{おだしまでんぞう} 老人と、近頃両国の水茶屋を引い

て、行儀見習のために来ている、銭形平次の 許^{いいなずけ} 嫁 お静。それ

に主人新三郎の遠縁に当る美しい中年増のお吉^{きち}、外に下女やら庭

掃きやら、ほんの五六人が鳴りを鎮めて、主人夫婦の帰りを待つ

ておりました。

そこへこの騒ぎです。

「それッ」

と飛出してみると、玄関にへた張った勇吉の背中には、主人新

三郎の一粒種、とつて五つの新太郎^{しんたろう}が、これも眼を廻したままおんぶしておりました。

「あッ、若様が」

「どうしたことだろう」

身分柄、贅^{ぜいたく}沢^{うすもの}な羅物を着せた、男人形のように可愛らしい

新太郎を抱き取つて、医者よ、薬よという騒ぎ。幸い間もなく正気付きましたが、余程ひどく怯^{おび}えたものと見えて、啜^{すす}り泣いたり顫^{ふる}えたりするばかりで、容易に口も利けません。

若党の勇吉は眼を廻したまましばらく玄関の板敷に抛^ほつておかれましたが、御方便なもので、これは独りで正気に還りました。さすがに面目ないと思つたものか、コソコソ逃げ出そうとすると、

「これこれ勇吉」

小田島老人が後ろから呼止めます。

「へエ、へエ」

「一体これは何という態さまだ。大事な若様を預かりながら、腰を抜かしたり、眼を廻したりする奴があるかッ」

「へエ——」

「第一、何でお前だけ先に帰って来たのだ。奥様方はどうなすつた。判然はつきり言えッ」

昔むかし氣質で、容赦ようしやがありません。

「へエ——」

勇吉というのは、二十五六の好いい若い者、見たところは、充分

賢そうでも、強そうでもあるのですが、何の因果か生れ付きの臆病者で、——「腰抜けのくせに勇吉とはこれ如何いかに？」——などと、のべつに朋輩衆から擲から揶かわれている厄介者だったのです。

「頭を搔いて済むところではない。何が一体お前を取って食おうとしたんだ、言わないか」

「へエ——、どうも相済みません。両国の人混みの中で、奥様やお女中方を見失ってしまいました、どうせお帰り支度のようでしたから、浜町へ一言お断りして、若様をおんぶしてやって来ると——」

「——フム」

「どうも——、人間が皆んな両国に集まってしまったせい、今

晩の江戸の淋しさというものはありませんでしたよ」

「馬鹿野郎」

「どこへ行つたつて人っ子一人居やしません。背中の若様という
いろお話をしながらやって来ると、人形町の往来で、いきなり前
に立ちはだかった者があるじゃありませんか。何だろうと思つて、
ヒョイと見ると、ブル、ブル、ブル」

「^{しっか}確りしろ、なんて間拔けな声を出すんだ。好い若い者の癖に」

「それがその、一件なんです」

「何だ、一件というのは」

「^{はりつけばしら}磔柱を^{しよ}背負つた、血だらけな男で——」

「えッ」

「今日鈴ヶ森で処刑おしおきになった、お主しゅ殺しの何とかいう野郎ですよ」

「そんな馬鹿な事があるものか」

「馬鹿だか馬鹿でねえか、若様に聞いてみりやア判ります。――ハツと思つて駆け抜けると、そいつがまた執念深く追っかけて来るじゃありませんか。人形町から八丁堀まで駆け通し、お屋敷の玄関へ着くと気がゆるんでブツ倒れてしまいましたが、まだ門のあたりに磔柱を背負つた血だらけな奴が居やしませんか、そつと覗いてみて下さい」

齒の根も合わないような恐怖のうちに、これだけ話の筋を通すのは、勇吉にしては全く手一杯の努力でした。

「そんなものが居てたまるか、馬鹿野郎。確りしろ、みんなお前の臆病がさせたことだ」

小田島老人はまるで相手にしません。

「そう言つたつて、途中でブツ倒れずに、ここまで辿りついたらだから、少しは褒めてやつて下さいよ。背中に大事なお主がいらつしやると思つて、一生懸命気を張り詰めたんだ。ね、そうじゃありませんか」

「目の廻しようにを自慢するんじやあるまいネ、呆れた野郎だ。このうえ若様の御容体が悪かったら勘弁しないぞ」

「へエ——」

この騒ぎの中へ、主人笹野新三郎と、妻のお国は相前後して帰

つて来ました。

二

与力笹野新三郎一家に対する不思議な崇^たりは、これをキツカケに、執念深く繰り返されました。

倅^{せがれ}の新太郎があ晩から虫を起して、夜もおちおち眠れない有様。若い母親のお国の心労は一と通りではありません。

その晩も漸^{ようや}く新太郎を寝かし付けて、さて雨戸を締めようとすると夜更けまで開けておいた窓の障子へ、遅い月に照されて、ハッキリ映っているものがあります。

ハツと思つて見直すと、紛れもない人間の生首。

「あつ」

お国は思わず声を立てました。

しかし、さすがは武家の女房で、生れ落ちるから躰たしなみを教わつておりますから、そのうえ騒さわぎ出すようなことはしません。

そつと床を脱け出して、隣の室へやに寝ている夫新三郎を揺り起しながら、

「旦那様、旦那様、ちよつと、お目に掛けたいものがございます」と囁ささやきます。

「何だ、泥棒でも入ったというのか」

一刀を提ひっさげて、寝巻のままやって来た新三郎。お国の指さす

方を見て、これも思わずギョツとしました。

遅い月が一杯に射した窓格子に、生首が一つ、髻を格子に絡んだまま、ブラ下げてあつたのです。

「フーム」

新三郎は一度は唸^{うな}つて躊躇^{ためら}いましたが、次の瞬間には、障子に手を掛けるとサツと引開けました。

水のごとく流れ入る月影。

その青白い光を半面に受けて、窓格子に括^{くく}り付けられているのは、血だらけの中年男の生首、カツと眼を見開いて、白い歯に下唇を噛んだ、怨^{うら}みの物凄い形相は、二た眼と見られません。

「あッ」

お国は気が遠くなつたようにそこへ崩折くずおれると、何に驚いたか寝付いたばかりの新太郎は、火の付くように泣き出しました。

笹野新三郎の記憶にはこの首の相好そうごうが焼き付くように、まぎまぎと残っております。忘れもしないそれは、今日鈴ヶ森おしおの処刑場きばで打ち落した首の一つ、死に際まで生の執着にもがき抜いて、一番醜い、一番物凄いい最期を遂げた、匱にせがね金使いの男の首だつたのです。

それから引続いて起つた不祥事は、不思議なことに、なんか、お仕置のある日に限られておりました。ちようど吟味与力笹野新三郎を忌避して、無実の罪を訴えでもするように、生首と死体とが実に頑固な威嚇いかくをくり返しました。

いろいろな人手を殖やして、締りや夜廻りを嚴重にしましたが、結局は何の験しるしもありません。家の中へ入れないと見ると、処刑場から盗んで来た不浄のものを、塀の外から庭へ投込んで、スタコラ逃げ出してしまふのです。

「旦那様、何とか遊ばして下さいまし。このまま抛ほうっておおきになると、相手は増長して、何をやりだすか判りません」

お国は時折そんな事を言つて、夫新三郎の決意を促しますが、新三郎にはどんな考えがあるか、それを取上げようともせず、言葉少なにうなづく日が多くなるばかりでした。

思案に余ったお国は、夫新三郎の留守の時、そつと石原^{いしはら}の利^り助^{すけ}を呼んで、相談してみる気になりました。

お国は二十六の女房盛り、美しさも賢さも不足はなかったのですが、倅新太郎の容体がはかばかしくないのに、後から後から不気味な事ばかり続いては、ツイ我慢がしきれなくなつてしまったのです。

「利助、こういうわけだ。役目柄、こんな事が世間に知れてはまづいが、何とかなるものなら、一と骨折つてはくれまいか」
と言うと、

「よく判りました、奥様。何の、たかが虚^{こけ}仮^{おど}脅^どかしの化物ごっこ

ぐらい、口幅つたいことを申すようで恐れ入りますが、この利助の黒い眼で睨めば、一と縮みでございましょう」

利助は大呑込みで、少し光沢のよくなった中額をツルリと撫で上げます。錢形の平次と同じように、笹野新三郎には恩顧を受けている御用聞ですが、近頃は若い平次の評判が馬鹿に良いので、少しはムシヤクシヤしているところへ、お国がこんな相談を持ちかけたので、渡りに船の心持で乗り出してしまったのでした。

「これはやはり、内に手引するものがありましょう。外からだけでは、そんな器用なカラクリは出来るものじゃございません。ただ今お屋敷に居る人別を片っ端からおっしゃって下さいまし」

「主人と私と坊やの外には、身内の者というと、主人の遠縁で、

お吉さんというのが居るよ。年は私と同じ二十六で、そりやア美しい人だが、お前は逢ったことがなかったかねエ」

「いえ、存じております。元なんでも旦那様のところへお嫁にいらつしやるようなお話のあったのが、御両親がお亡くなりになつて、そのまま縁談は流れ、それつきりお宅の掛^{かかり}人になつた方でございましょう」

「よくお前、そんな事まで」

「ヘッ、ヘッ、商売商売で、そんな事に抜け目はございません」

「気味が悪いねえ」

「疑えばまずその方が疑えるわけでございますね。旦那様にも奥様にも、そう言っちゃ何ですが、怨みがましい心持を持つとすれ

ば、このお屋敷の中では、その方が一番強いわけで——」

「そうねえ、そう言えば言えないこともないけれど、お吉さんはそりやいい方なんだよ」

「大それた事をする人間は、思いのほか人触りのいいものでございます。それから外には」

「あとは奉公人ばかり。まず用人の小田島さんに」

「あの方は化物とは縁がございません」

「若党の勇吉——」

「あの臆病者の！」

「それに、平次の許嫁のお静」

「フーム」

お国は片っ端から雇人を数え上げましたが、石原の利助の興味をひいたのは、お吉一人だけ。

「そのお吉さんと呼んで頂けませんでしょうか」

「そんな事をしたら、一ぺんに主人へ知れてしまいます」

「構やしません。今のうちに睨みを利かしておかないと、増長してどんな事をするか解りやしません。それに旦那様は下総しもとうさの御領地の方へお出かけだそうじゃございませんか」

「知行所の世話番の方が御病気で、その代理にいらしたから、四五日はお帰りが無いだろうよ」

「ちようどいい塩梅あんばいじゃございませんか。鬼の留守と言っちゃなんです、その間に埃ほこりの出るものなら、引つ叩たたいてみましょう」

事ごとに若い平次にしてやられて、少し功を急ぐ心持のある利助と、賢いようでも、夫新三郎と縁談の噂うわさまであつたお吉に対して、日頃妙に嫉妬しつとを感じているお国とが、とうとう大変なところで意見が投合してしまったのです。

四

こう屋敷中で見張っているところへ、新太郎の膳のお菜の中へ、いわみぎんざん石見銀山のねずみと鼠捕りを入れたものがありました。幸い子供心にも、匂いを嫌つて食わなかつたから助かつたものの、それでもなければ、一とたまりもなくやられてしまったところでしよう。

お国はツイかつとしてしまつて、石原の利助を呼寄せ、二人相談の上、主人新三郎は留守ですが、とりあえずお吉をひと間に閉じ籠め、利助は丁寧な口調ながら、水も漏らさぬ調子でひと責め責めてみました。

「ね、お吉さん、こんな事を言いたくないが、細工が器用すぎて、お前さんのような方でなきやア、出来ない芸当だ。旦那様や奥様を怨むのも尤もだが、何にも知らない若様を脅かしたり、石見銀山で命まで奪ろうとするのはヒドカろう」

「あれ、お前は何を言うのだい。本当に呆れて物が言えない」

「白ばつくれちやいけねえ、ここで口を開かなきやア、お白洲の砂利を掴ませるばかりだ。穩便に願つて身を退く方が、お前さん

のためじゃないかね」

「まア、何という事だろう。この間つからの不気味な悪戯わるさが私の仕業だとも言うのかい」

今では掛かかりうど人で、奉公人も同様ですが、もともと育ちのいい

お吉は、老獺ろうかいな岡っ引に絡んで来られると、口もろくに利けま

せん。おろおろしながらこんな事を言うのがせいぜい、利助の張り渡した罫わなに掛けて、やがてはどんなことになるか判らない有様です。

「お前さんは、旦那様と奥様の仲の好いのを好い心持で眺めているわけじゃあるまい」

「そりやア私だって人間だもの、でも——今では何もかもあきら

めているんだから、お主だと思ってお勤めしているよ」

「うまく言うぜ、そんな甘い口に乗るものか。とにかく、お前さんを放し飼いにしておいちや物騒でかなわねえ。窮屈でも旦那様のお帰りまで、ここで我慢をして貰おうか。もつとも、その間俺が伽ときをしてやるから、淋しがらせるような事はねえ」

とうとうお吉を納戸に投ほうり込んで、利助が鵜うの目鷹たかの目で見張る事になってしまいました。

驚いたのは、お吉と一番仲よくしていたお静です。

平常ふだんから心掛けの良い、少し気の弱いお吉が、どんなに嫉妬に眼くらが昏くらんだにしても、そんな大それた事を仕出かそうとは思われません。一と言お吉のために——と思わないではありませんが、

奉公人の悲しさで、奥様へツケツケと意見がましい事が言える身分でもなく、それに、お吉を封じ込んだ納戸の前には、少しばかり職業的な物凄さを持った、老獪無比の岡っ引が、鼠一匹もただでは通さじと見張っているのです。

思案にくれているところへフラリとやって来たのは、お静とは許嫁の仲の、錢形平次です。

新三郎はまだ下総から帰って来ないので、用事は足りませんが、奥へちよつと挨拶をして、何の気もなくお勝手へ下がろうとすると、日頃仲のよくない石原の利助が、閉め切った納戸の前に座蒲ざぶ団どんを敷いて、少し脂下やにさがりあにきに安煙草の輪を吹いております。

「お、石原の兄哥あにき。どうしたい」

「銭形のか、久し振りだったな」

「掛け違つて久しく逢わねえが、そこで何をしているんだ」

「なアに、何でもねえよ」

「……………」

少し妙な調子——、頭の早い平次は、仔細ありと見てとつて、そのうえ追及をせずに、天氣の挨拶かなんかをして引下がつてしまいました。

お勝手口から、八丁堀の往来へ出ると、

「ちよいと、親分、待つて下さいな」

少し息を切つて追つて来たのは、先刻^{さつき}お勝手でチラリと顔だけ

見せたお静です。

「何だ、お静坊^{しい}か。親分てえ奴があるかい」

「だって、私には何と呼んでいいかわからない」

「まあいいやな。まさかこちの人とも言えまいから、何とでも言
つておくが いいやな」

「あら」

「ところで用件は何だ。美しいところを見せようて寸法ばかりじ
やあるまいね。大方納戸の前に頑張っている石原の一件だろう」

「え、そうよ、大変な事が始まったんです。お吉さんが可哀想で、
可哀想で」

「何をいきなり涙ぐみやがるんだ。順序を立てて話してみるがい
い」

捕物の名人銭形の平次と一時両国で鳴らした美しいお静とは、人目と陽射しを避けて、街の片蔭へ入りました。

五

それから銭形の平次は、お静と謀^{しめ}し合せて、死物狂いの活動を始めました。まかり間違えば、一方ならぬ恩顧を蒙った笹野一家に、拭うことの出来ない瑕疵^{きず}の付く事件ですから、主人新三郎の歸りを便々として待っているわけには行きません。

石原の利助はすっかりお吉を張本人と決めてしまつて、屋敷の外から呼応した、相棒の名を言わせようと、手を替え、品を替え

責め立てますが、お吉は執拗に口を緘つぐんで、悲しくも眼を伏せるばかり。まさか拷問ごうもんにかけるわけにも行かず、二三日の後には、石原の利助も少し持て余し気味になりました。

一方、その間に平次は、第一番に奉公人の身許を洗ってみしました。小田島伝蔵老人の三十何年を始め大抵は五年十年と勤めた者ばかり、一番短いので一年以上ですから、主人を怨む者があるうとも思われません。

お仕置のあるたびに、何か嫌がらせな悪戯わるさをした事を思い付いて、この三年の間に、笹野新三郎の手掛けた事件で、無理な罪に落された者はないかと、いろいろ調べてみましたが、笹野新三郎は近頃の名与力で、辛辣しんらつな加役などからは、手緩てぬるいと評判を取

つている人物、人に怨まれる筋などがあるうとも思われませんか。
平次の調べは遅々たるうちに、またもう一つ大変な事が起つて
しまいました。

それは、近頃はすっかり丈夫になつてお静と一緒に庭や門の外
まで遊びに出ていた新太郎が、水天宮様の縁日へ行つてみたいと
言い出したのです。

お国も思案に余つて利助に相談すると、新太郎へ崇つたお吉は
この通り取つちめているから、大概大丈夫だろうという話。子供
には甘すぎるお国は、それでもと留めるほどの母親ではありません
ん。

念のため、お静の外に勇吉を付けてやりましたが、それから二

た刻^{とき}あまり、日が暮れそうになって、勇吉がたった一人、

「若様とお静さんはまだ帰りませんか」

フラリと、気楽な顔をして戻って来ました。

「坊やとお静が、どうしたと言うのだい」

お国も驚いて飛んで出ました。

「お静さんが知ってる人に逢つて、境内の水茶屋に入りましたが、いつまで経つても出て来ません。どうかしたら裏から帰ったのじゃないかしらと思って戻って参りましたよ」

という気のない話です。

「それッ」

と手分けをして、八方を探しましたが、どこへ行つたか、新太

郎とお静の行方ゆくえはさらにわかりません。

水茶屋で聞くと、混んでいる最中で、気が付かなかつたと言ひ、お静の里やら平次の留守宅やら、心当りへ全部人を出しましたが、どこへも行つた様子はなく、二人の姿は、水天宮様の境内から、煙のように消えてしまつたのではないかと思うような、見事な失し踪つそぶりです。

お国は氣も顛倒てんとうして、

「坊やを探しました者には、望み次第の褒美をやる」

と言いますが、これだけに手際よく誘拐かどわかされては、手の付けようがありません。

その騒ぎの中へ、一人の女中が変なものを持って来ました。

「ただいま、お勝手口へこんなものを投^{ほう}り込んで行^いった者がござ
います」

と差出したのは、急^{きゆうごしら}拵^えらしい結び文。

「どれどれ」

利助が受取^{まづ}つて中を開くと、拙^{みくだり}い仮名文字でたった三行ばかり。

——新太郎を殺したくなかったら、お吉をゆるせ。その女に罪
はないぞ——

と書いてあります。

「畜生ッ、人を嘗^なめた事をしやがる。外に居る仲間が、お吉を助
けようとしての細工だ」

利助は地^{じだんだ} 踏んで口惜^{くや}しがります。

「坊やに万一の事があつてはならない。口惜しいけれど、その女を納戸から出して、どこなど、好きなどころへやつておくれ」

お国はさすがに母親らしい弱いことを言いますが、

「とんでもない奥様、これは術^てですよ。女を助けたところで若様を返すとは言やしません。それよりこの女をお白洲に突き出して、言わせるようにして物を言わせましょう。この女さえ口を開けば、何もかも判つてしまいます」

利助は意地になつて聴き入れません。

「どうなとお前のいいようにしておくれ。私には、何が何だか判らない」

お国は精も根も尽き果てて、たださめざめと泣くばかりです。

「よし、この上は容赦しねえ。女来い」

納戸を開けて、三日越しの監禁に、すっかり弱り果てているお吉を引出しました。

「これ、何をするのさ」

「黙って来てみりや判る。それが嫌なら、相棒の名前とその巢を言えッ」

いきなりねじ倒して、悲鳴をあげるお吉の腕を後ろに、キリキリと縛り上げてしまいました。

「邪魔が入ると面倒だ、歩けッ」

「じゃけん
邪慥に縄尻を引くと、

「あッ、ッ」

悲鳴をあげてお吉は縁側に倒れかかります。

六

平次が飛込んで来たのは、ちょうどその後――。

「若様がお見えなさらない？　何ッ、水天宮様で誘拐かどわかされたッ」

お勝手から奥へ真一文字に、

「奥様、大変なことになりました。さぞ御心配でいらつしやいましょう」

今度の事件では、面白くないことばかりの平次ですが、こうな

つては遠慮してもいられません。敷居の外から声をかけて、お国の機嫌を伺います。

「お、平次よく来てくれた——。どうぞ坊やを助けてやっておくれ、お願いだよ」

日頃の嗜み^{たしな}も忘れて、しどろもどろに取乱しております。

「石原の兄哥^{あにき}はどうしました」

「お吉さんに縄を打って、どうしても仲間の事を白状させるつて、奉行所へ行つたよ」

「えッ、そんな、そんな無法な事を」

「そうでもしなければ白状する女ではない」

「とんでもない、お吉さんは何にも知っちゃいません。それより

吟味与力のお家から、縄付を出してその納まりがどうなると思います」

「え？」

「軽くてお役御免、重くて食禄召し放し。旦那様が家事不取締の罪は免れまぬかません」

「えッ」

「それではなくてさえ、お若くて切れものの旦那様、お役所向きは味方ばかりと思うと大当て違い、これはとんでもない事になりましたなア」

平次の恐れるのはそれでした。吟味与力で相当に敵も作っている笹野新三郎が、家族から縄付を出して晏あんじょ如としていられる道

理はありません。

お国は女で気がつかないのも無理はありませんが、そんな事は百も承知の助の石原の利助が、宵とはいっても、人の目につかないとは限らない縄付を、与力の家の門から引張り出して、わざわざ奉行所まで伴つれて行くとは何とした事でしよう。

「若様は急に命に拘かかわる事もありますまい。それより大事なのは、お家の瑕きず瑾ぎんにもなる縄付の始末です。利助はいつ頃ここを出かけました」

「ツイ今しがた」

お国はさすがに恥入って顔も挙げません。

「それでは及ばぬまでも追っかけてみましょう。御免」

平次は挨拶もそこそこ、真一文字にお勝手へ抜けて、
数寄屋橋すきやばしの南町奉行所まで、韋駄天いだてん走りに駆け付けました。

七

三十間堀へ来ると、宵暗よいやみながら、向うへ急ぎ足に男女の人影。
「石原の、ちよいと待って貰おうか」

平次は飛鳥のごとく駆け抜けて、二人の前へ立塞たちふさがりました。
「何だ平次か、何の用だ」

石原の利助は、以てもつの外の機嫌で平次を見据えます。

「お吉さんは何にも知っちゃいねえ。気の毒だが縄を解いて渡し

て貰えまいか」

「何を言やがる。こつちには証拠があつてすることだ。十手捕縄を預かる利助に、人を縛つちやならねえという法でもあるのか」

「そうじゃないよ、兄哥。吟味与力の笹野の旦那のお屋敷から、縄付を出したとあつちやそのままじゃ済むめえ。お互い旦那には言葉に尽せねえ恩を受けている身体だ。よしんばどんな証拠があつたにしても、お吉さんにお白洲の砂利を嚙ませて、笹野の旦那の破滅にはしたくねえ。解つたかい、石原の、お願ねげえだから、その縄を解いて俺に渡してくれ。あの悪いた戯ず者ものや誘拐かどわかの悪者は、俺がキツと探し出して、お前の手柄にさしてやる」

「えッ、何を言やがる。黙って聞いていりや、悪者を縛つて、俺

の手柄にさしてやるツ？ 若僧の癖にしやがってなんて口の利き

ようだ、憚りながら石原の利助は手前よりはばかは十年も前から十手を

預かつてるんだぞ。帰れ、さっさと帰りやがれ、尻尾を巻いて消

えてなくならないと、ただは置かねえぞ」

「それじゃ、兄哥、これほどまでに頼んでもか」

「知れた事を言えツ、この女は近頃の大物だ。手前などに横奪りよこどされてたまるものか」

「えッ、聞分けのない。笹野の旦那のためだ」

飛付くようにお吉の縄尻を引ったくつて、急せわしく解きにかかる

と、

「何をしやがる」

利助は年甲斐もなく、平次へ武者振り付きます。

「兄哥、勘弁してくんな」

身体を捻^{ひね}った平次、よろめく利助の後ろから、力任せに突き飛ばすと、一とたまりもなく道端の濠^{ほり}の中へ。

「あッ」

折からの上^{あげ}汐^{しお}、あぶ、あつぷとやる利助を尻目に、

「詫^わびは後です。兄哥勘弁してくんなよ」

お吉を促して元来た道へ、平次は飛ぶがごとく取って返します。

平次が利助を追って駆け出した後――。

笹野新三郎は下総しもとうさから帰って来ました。虫が知らせるというものか、妙に里心が付いて帰って来てみると、ちょうど下総の知行所へ急使を立てたばかりというところ、家の中は煮えくり返るような騒ぎです。

「お国や奉公人達から、いろいろな話を聞いて、驚きに驚きを重ねていると、先刻水天宮様からぼんやり帰って来た勇吉が庭口からヒョックリ顔を出して、

「旦那様、今思い出しましたが、水天宮様の水茶屋へ、お静さんを誘い入れた男が判りましたよ」

妙な事を言い出します。

「なんだって今まで黙っていたんだ。誰だ、その男というのは！」
 「すっかり忘れていました。——その男てえのは、名前はわかりませんが、なんでもお茶の水辺の男で——」

「家は知ってるか」

「行ってみたら大抵見当はつきましよう」

「よし、それじゃ案内しろ」

新三郎は、飛立つ思い、旅装束のまま、駕籠かごを二挺呼んで、驀まつしぐら

地にお茶の水へ——。

昌平橋しょうへいばしまで来ると、

「ここで降りて歩かなきゃなりません。駕籠で行っては拙い」
 案内者の勇吉がとんでもないことを言い出します。

仕方がないから駕籠を帰して、勇吉を先に立てた新三郎。聖堂の前をダラダラ登って、お茶の水の方へ、その頃は橋はありませんが、眺めの良いところで、数丈の断崖の上へお茶屋が二三軒建ち並んでおります。余談に^{わた}互りますが、その後『江戸名所図会^{ずえ}』を描いた^{はせがわ}長谷川雪旦が、ここのお茶屋で風景を写生して、謀反人と間違えられた——などという話の伝わっているところです。

お茶屋といったところで、道端に建った粗末な板屋根で、お茶の水の絶壁数丈の下から、足場を組み上げて張り出した、^{よしず}葭簀張りの涼しい別室が名物。昼はいくらか客もありますが、日が暮れるとサツと店をしまつて、婆さんと娘が、菓子箱と^{ひもうせん}緋毛氈を背負い、^{おおやかん}大薬缶をブラ下げて自分の家へ帰ってしまいます。

もつとも、この辺一帯、聖堂の前から元町へかけては、恐ろしく淋しいところ、明治になってからでさえ、松平某の皮剥事件かわはぎがあつたくらいですから、旧幕時代は追剥と辻斬りの本場といつてもいいところだったのです。

臆病者の勇吉が、そこへスタスタと入つて行つたのですから、笹野新三郎も少し面喰らいました。

しかし、一子新太郎の生死にも拘わる場合、贅沢ぜいたくを言つていゝる時ではありません。勇吉の後について、黙つて行くと、三軒ある断崖の上の茶店の一番奥、久しい前から立ち腐れになっている家の表戸を開けて、

「ここでございますよ、旦那」

勇吉は案内顔に入っていきます。

「ここに新太郎が居るといのか」

「確かにここに相違ありません。灯^{あかり}を用意して来ますから、ちょいとお待ち下さい」

新三郎を中に誘い入れて、勇吉はそのまま外へ出てしまいました。

しばらく待ったが帰って来ません。なにぶんひどい闇で一寸先も判りませんが、床板一枚の下は、数丈の絶^{ぜつがい}崖ということだけは、遙かに聞える水音で判ります。

「ハテ」

新三郎は立上がりしました。愚直な勇吉を信じ切ってはいますが、

何となく不安な心持になったのでしよう。立上がつて戸口の方へ探り寄ろうとすると、床板の釘が抜けていたものか、それとも、おとしあな陥穽の仕掛になっていたものか、足の下板が一枚、パツと跳ね返ると、

「あッ」

新三郎の身体は、数十尺の下へ、支えるものもなく落ちて行きます。

九

「ヘッ、ヘッ、とうとう陥おち込みやがつたか」

どこからともなく、闇の中の人声。

燧ひうち石いしに鎌の当る音がすると、パツと蠟燭ろうそくが点ともされた。

見るとそれは、今まで臆病者とはばかり思い込ませていた若党の勇吉。妙に引ひき緊しまった凄ひそい顔をして、裸蠟燭を片手に、新三郎の陥ち込んだ穴を覗きます。

「おーい兄あにき哥」

「勇吉か」

遙かに下からは応ずる声。

「野郎はどうなった」

「まだ落ちて来ねえぞ」

「そんな事があるものか」

「落ちて来さえすりやア、ボチャンとか何とか音がするだろう――
 一万一舟か岸へ這はい上がるようなら、竹槍で芋刺いもざしにするつもり
 で待っているが、一向音沙汰はねえぞ」

「はてな」

勇吉は左手の蠟燭を穴の中へ差し込むようにして下を覗きまし
 た。

「あッ、居るぞ、居るぞ」

「それ見ろ」

床の下たくまの逞はりしい梁から垂れた握り太の麻縄。その中ほどのところ
 に、雁字がんじがらめにして猿轡さるぐつわを噛ませた、新太郎とお静を吊
 してありますが、その縄の上から三分の一のほどのところに、も

う一人、人間がブラ下がっているのです。

言うまでもなく穴から落ちる機^{はず}みに、運よく麻縄を探り当てた笹野新三郎、無我夢中で獅^し噛^がみ付きましたが、身体に落ちる勢いが付いていたので、両手の掌^{てのひら}をひどく擦^すり剥^むいたために、麻縄を掴^{つか}むには掴んだものの、手繰^{たぐ}つて上がることが出来ません。

歯を喰い縛つて辛くも身体を支えているうちに、上から射した蠟燭の光で、自分をこの九死の境に陥れたのは、臆病者の勇吉だとはわかりましたが、下の舟に居る相棒がわかりません。

その顔を見るつもりで、大骨折りで身体をねじ曲げると、最初に眼に映ったのは、舟の中の曲^{くせもの}者ではなくて、自分の足の下、同じ麻縄に縛られて、宙にブラ下がっている、倅^{せがれ}新太郎とお静の

浅ましい姿です。

「あッ、新太郎。——お静も」

と言ったが、どうすることも出来ません。

上の勇吉は早くもそれに気が付いたか、

「旦那、気が付きなすったかい。父子主従三人一緒に死ぬのも因

縁事だ。ヘッヘッ、かえつてあきらめが付いてようがしよう」

憎々しくも齒を剥むきます。

「勇吉、お前は何だつてこんな事をするんだ。随分目をかけて使
つてやったはずだが、何の怨みでこんな非道なことをする——、

俺を怨むのはともかく、罪も科とがもない新太郎やお静をこんな目に

あわせて済むと思うか——」

新三郎は血を吐く思い、次第に力の抜ける掌^てに、わずかに身体を支えて悲憤^{まなじり}の眦^{まなじり}を裂きます。

「まだ解らないのか。今下の舟にいる兄^{はりつけ}哥^{ばしら}に、磔^{しよ}柱^{しよ}を背負^{しよ}わせて、その餓鬼^{がき}を脅^{おそ}かしたり、鈴ヶ森から梟^{さうしくび}首^{くび}を持つて来て、窓の外へ掛けたのは、みんな俺達の深い怨みを思い知らせるためだったよ——。血の巡りが悪いからお前は気がつかなかったろうが、何を隠そう俺達はな、——八合判のいかさま枡^{ます}を使^{つか}ったという罪で、三年前に獄門になった、米屋——越後屋勇助^{えちごやゆうすけ}夫婦の忘れ形見だよ」

「えッ」

「悪い番頭が勝手にそんなものを拵^{こしら}えて、自分の懷^こを肥^こやしてい

たのを、何にも知らない俺達の親父とお袋が罪を背負わされ、いかさま枡は罪が深いというので、鈴ヶ森で白髪首を並べて梟^{さくら}されたことは、よもや忘れはしめえ、みんなお前のした事だよ。その上、世上の憎しみが加わって、お袋が臍^{へそ}くりでやらしっていた、この茶店まで立ち腐れになり、俺達二人は長い間食うや食わずの路頭に迷った上、讐^{かたき}が討ちたいばかりに伝^{つて}手を求めて、弟の俺がお前のところへ奉公に上がったんだ」

「……………」

「いかさま枡を拵えた張本人の番頭は、それっきり行方知れず。俺達兄弟の怨みは、両親に縄を打ったお前——与力笹野新三郎にかかるのは当り前の事じゃないか」

「……………」

「下にいるのは俺の兄哥の勇五郎だ。その縄を這い上がったつて、下へ飛降りたつて助けるこつちやねえ、——いつまで苦しませるのも殺生だ。この辺で引導を渡してやろう、——見ろ」

「……………」

「兄哥、落してやるよ。気を付けてくれ」

「よし心得た。宙に留めて竹槍で芋刺だ」

勇吉はどこから持つて来たか、脇差を抜いて麻縄を切り始めました。

三本縊り合せた丈夫な縄へ、ドキドキする刃を当てて、

「それ一本」

ブツリと切ると、縄の縊りが戻ってキリキリと三人の身体は宙に廻ります。

一〇

「もう一本」

「待て、待て勇吉。お前の怨みは筋違いだが、今更それを言っても始まるまい。——私^{わし}はあきらめて殺されましょうが、倅とお静には罪はないはずだ。私はこの手を離して下の川へ落ちるから、縄を切らずに、後の二人を引上げて助けてくれ。頼むよ、勇吉」

新三郎は下から、わずかに支える身体をのし上げて、必死の言

葉を絞りますが、赤い蠟燭の灯影ほかげに、物凄まじく描き出された、勇吉の顔の怨みは解けそうもありません。

「どうしような、兄哥」

「どうもこうもねえ。俺達は両親ふたおややられたんだ。さつさと切つてしまえ」

「よしッ」

刃はまたもブツリと第二本目の縄を切りました。
やいば

「さあ、あと一本だ、念仏でも称となえろ」

逆落しに毒々しい声。

「新太郎、お静、気の毒だが、お前達も聞いての通りだ。あきらめてくれ、一緒に死ぬんだぞ」

と観念を決めた新三郎、俯向うつむき加減に下へ言い送ります。

「いい覚悟だ」

と勇吉が最後の一本へ刃を、

「南無——」

その時遅く、

宙を飛んで来たは一枚の錢。

勇吉の拳をハタと打って、思わず、脇差の手が緩むところへ、

「待て、待て、待て」

闇の中から、錢形の平次が飛出しました。

「えッ、邪魔をしやがる」

振り上げた脇差は叩き落されて、上になり下になり、しばらく

とつ組み合いましたが、平次の力は遥かに優つたものとみえて、勇吉をとつて押えて、猫の子のように掴み^{つか}上げると、

「どうともなれッ」

数十尺の下、夜のお茶の水の流れの中へ、水音高く投げ込んでしまいました。

＊

平次が危機一髪のところへ駆け付けたのはこうしたわけでした。三十間堀に利助を叩き込んで八丁堀へ引返した平次。主人新三郎が勇吉に誘われて出かけたと聞くと事件の秘密が鏡に映したよ

うに、判然^{はつきり}わかつてしまいました。

お静からいろいろの事情を聴かされた時、雇人のうち手引のあることも、役向きの事で怨みを買ったらしいことをも直観してしまった平次は、それから三日経たないうちに、独特の機関で奉公人の全部の身許を洗い上げ、秘し隠しに隠してはいるが、若党の勇吉が刑死した越後屋の倅であつたことも、お茶の水に立ち腐れになった茶店のあることも知り尽していたのです。

勇吉が「お茶の水辺」と言つたと聞いて、大方事件の落着きを察した平次は、駕籠^{かご}と自分の足とを存分に働かせて、危機一髪の場合に間に合つたのでした。

新太郎やお静と一緒に、大骨折りで茶店の床へ引上げられた新

三郎は、

「勇吉兄弟を捕えろ」

と言うと、平次は暗い夜の水を眺めながら、

「多分死にましたよ、放っておきましょう。親が無実で死んだと思ひ込んでゐるんですから、可哀想じゃございませんか——それに、あの兄弟は二度とあんな悪戯わるさをする氣づかいはありませんよ」と、けろりとしております。

青空文庫情報

底本：「銭形平次捕物控（九）不死の霊薬」嶋中文庫、嶋中書店

2005（平成17）年1月20日第1刷発行

底本の親本：「銭形平次捕物百話 第八卷」中央公論社

1939（昭和14）年

初出：「オール讀物」文藝春秋社

1931（昭和6）年9月号

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：結城宏

2018年1月27日作成

2019年11月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控

復讐鬼の姿

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>